



## ●色に関する子ども向け絵本紹介

### 『いろいろへんないろのはじまり』

アーノルド・ロベール作 牧田松子訳  
富山房発行 1975年 1600円+税

昔々、世の中に灰色と白・黒しかなかった頃の話です。「これでは雨がやんで日が照っても、さっぱりわからない」と思った魔法使いは、ある日、魔法の薬を作り、それを人々に分け与えたら世の中が青く染まりました。

しかし、青だけでは人々が悲しい気持ちになるので、新たに別の薬を作り、人々に分け与えると世の中は黄色に染まりました。しかし、黄色だけではみんなの目がチカチカするので、また別の薬を作り、人々に分け与えると世の中は赤に染まりました。しかし、赤だけでは人々は怒りっぽくなってしまいました。そこで、魔法使いがさらにあれこれ混ぜていたら、いろいろな色ができ、それらを人々に分け与えると、世の中がいろいろな色で満たされました。いろいろな色があるときれいで、人々の心も明るくなりました。

この本は、大人にも色が人の心に与える影響を考えさせ、色鮮やかな世界に暮らしている喜びを改めて感じさせてくれます。味わいある絵も素敵で、今でも多くの人に愛されています。(垣田玲子)

## ●生活と色の関係について

色彩を勉強したことがある人に比べ、全く色彩を勉強したことがない人は、生活の中で色を選ぶ時にとっても困ることがあります。

色彩学と言うと科学的、光学的、物理的などの専門分野のような感じで受け取られがちです。色彩を教えていると言われると、たぶんそのようや難しい分野だけの人はずさわっているように思われがちです。

しかし、ほんの少しの専門知識を得ることによって、幅広く自分自身も納得できる事が多くなると思います。

私は中国の芸術大学で色彩の物差しを教えながら配色の応用や、組み合わせの知識などを4回に亘り講義し、資料も配布しました。

その学校は建設ラッシュで、校長先生が私の色彩の知識を生かして壁の色を選んだと教えてもらった時は、とても嬉しく思いました。

なぜその色を選ぶのかには、心理的な知識も必要です。

組み合わせやイメージの知識を知ることにより、簡単に色を選択することができるようになるので、これからは、生活の色という観点から、色彩の知識の知るきっかけの応援ができればいいと考えています。(田森恭子)

## ●大辞泉ひろいよみ 51 一き

**黄不動**：きふどう。仏画。岐阜県大津市の円城寺にある不動明王画像の通称。平安初期の作。全身が黄色で彩色されているのでこの名がある。赤不動・青不動とともに三不動の一。

**黄み**：きみ。黄色がかっていること。きいろみ。

**黄身**：鳥の卵の中の、卵白に包まれる球形の黄色い部分。卵黄。

**黄緑**：黄みを帯びた緑色。

**黄無垢**：きむく。表裏共に黄色で無地の着物。

**伽羅色**：きやらいろ。濃い茶色。

**きゅうり**：胡瓜・黄瓜。ウリ科の蔓性の一年草。夏、黄色の雄花と雌花とをつける。実は円柱形で、いぼがあり、緑色であるが、熟すると黄褐色になる。若い実を食用にする。インドの原産。野菜として栽培。からうり。

**きょうおしろい**：京白粉。近世、京都で作られた上等なおしろい。

**京染(め)**：きょうぞめ。京都で染めた、また京都風の染物の総称。鹿の子染め・友禅染めの類。

**郷土色**：きょうどしょく。風俗・習慣・産物などに表れるその地方の特色。地方色。ローカルカラー。

**京紫**：赤みのある紫。つややかで優雅な色合いからそう呼ばれる。(永田泰弘)